II　河原第3遺跡

本文目次

一　遺跡の位置と環境……1
二　調査の概要……2
　1．調査の目的と経過……2
　2．層序……2
　3．遺物の出土状況……4
　4．遺物の概要……4
三　まとめ……8

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（旧石器時代）……1
第2図　調査区設定図……3
第3図　細石刃部位別グラフ……5
第4図　出土遺物・断面採集遺物実測図……5
第5図　採集遺物実測図……6
第6図　採集遺物（細石刃核・細石刃）実測図…7

表目次

第1表　土層柱状図及び観察表……3
第2表　遺物観察表……6

図版目次

図版1
　上　遺跡近景
　中　土層堆積状況
　下　遺物出土状況

図版2
　上左　採集遺物（1）（押型文土器）
　上右　出土遺物（剥片）
　中　採集遺物（2）
　下　採集遺物（3）

例　言

○　本編は熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在する河原第3遺跡の試掘調査の概要報告である。
○　本遺跡は、1998年に熊本県教育庁文化課による遺跡台帳の改訂に伴い、正式名称が「西原A遺跡」から「河原第3遺跡」となった。本報告もそれを受けて「河原第3遺跡」の名称を用いて報告する。
○　調査は、熊本大学文学部考古学研究室が2000年9月7日～9月10日までの4日間おこなった。
○　調査及び整理担当者は以下の通りである。
　甲元眞之　小畑弘己　大坪志子（以上教官）
　冨永明子（熊本大学埋蔵文化財調査室）
　荒木隆宏　河合章行　橋口剛士（以上学部4年生）
　坂口三輝子　田代理恵　檜佳克　宮本千恵子　安武寛文　矢羽田幸宏（以上学部3年生）
　安部茂明　芝康次郎　西嶋剛広　前田耕輔　村田勉（以上学部2年生）
○　調査・整理については以下の諸氏・機関に御協力・御指導をいただいた。（敬称略）
　小谷桂太郎（西原村教育委員会）岡本真也　木﨑康弘　宮崎拓（以上熊本県教育委員会）
　岩谷史記　山下宗親（以上熊本市教育委員会）伊藤昌広　杉原敏之　髙橋慎二　林充彦
　山下実　吉留秀敏（以上福岡県旧石器文化研究会）藤木聡　松本忠（以上宮崎県埋蔵文化財センター）
　福田正文　西原村教育委員会
○　福田正文氏には採集遺物を提供していただいた。
○　遺物の実測は整理担当の学生が各自おこなった。製図は遺物を宮本が、その他を安武・芝・西嶋がおこなった。
○　本編の編集は安武がおこない、執筆分担については執筆者名を各文末に示した。
○　本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
○　本編におけるレベル高はすべて海抜をあらわし、方位は真北をあらわす。

一　遺跡の位置と環境

河原第３遺跡（西原Ａ遺跡）[1]は、熊本県阿蘇郡西原村大字河原に所在する。本遺跡は阿蘇南外輪山西麓の高畑山（標高796m）から西へと伸びる尾根上、標高512mの地点に位置する。近年、牧草地開発が進み、それに伴う農道開通により本遺跡は発見された。これまでに細石刃、細石刃核、ナイフ形石器、三稜尖頭器など、旧石器時代の遺物が多く採集されている。現在、遺跡周辺には、農道より北側にクヌギ林が、南側に牧草地が広がっている。また、東側には小川が北西へと流れる。周辺は沢によって開析され、起伏に富んだ地形をなす。

遺跡の位置

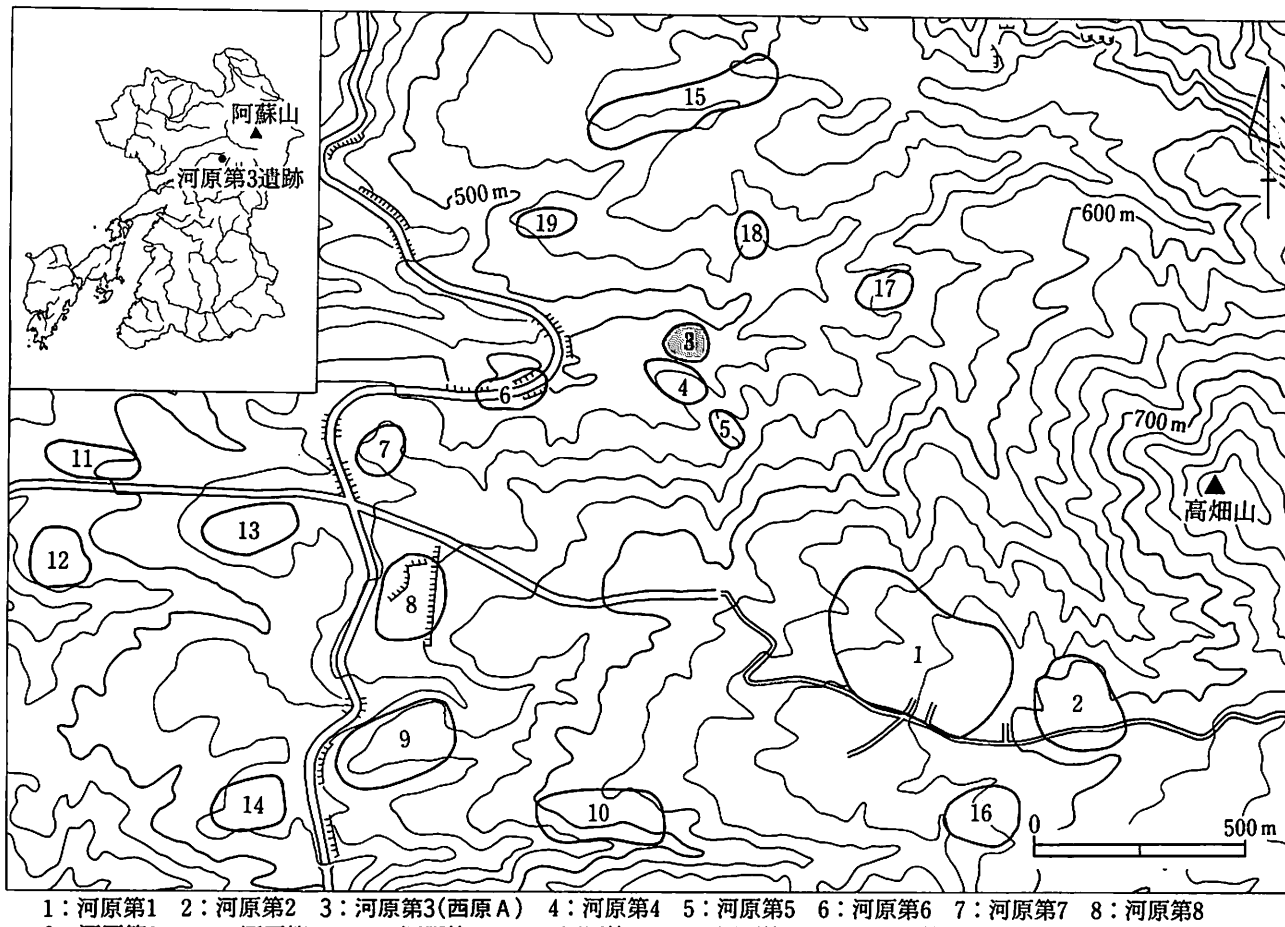
遺物の種類

遺跡の現在の環境

阿蘇外輪山南西裾野には、河原第3遺跡を含む旧石器時代から縄文時代にかけての多くの遺跡が、標高400～670mの尾根上に集中して立地する[2]。これらの地域は安山岩を基盤としており、在地産の安山岩が時代を通して石器の材料として利用されている。また、ナイフ形石器文化期には球磨川・緑川流域産チャートを、細石刃文化期には西北九州産黒曜石を多用する傾向があり[3]、時代ごとに石材利用の在り方は異なる様相をみせる。（宮本）

石材環境

註（１）本遺跡は、1998年、熊本県教育庁文化課による遺跡台帳の改定により「西原Ａ遺跡」から「河原第３遺跡」に変更された。熊本県教育委員会編『熊本県遺跡地図』　熊本県教育委員会　1998
（２）木崎康弘ほか「Ⅳ　遺跡と遺物」『肥後考古』第５号　肥後考古学会　1985
（３）藤木聡編「西原Ｆ遺跡３」『考古学研究室報告』第34集　熊本大学文学部考古学研究室　1999



1：河原第1　2：河原第2　3：河原第3(西原Ａ)　4：河原第4　5：河原第5　6：河原第6　7：河原第7　8：河原第8
9：河原第9　10：河原第10　11：河原第12　12：河原第13　13：河原第14　14：河原第15　15：河原第17　16：冠ヶ岳第5
17：大矢野原第24　18：大矢野原第25　19：大矢野原第26

第１図　周辺遺跡分布図（旧石器時代）

二　調査の概要

1．調査の目的と経過（第２図）

河原第14遺跡調査成果

熊本大学文学部考古学研究室では、阿蘇周辺の旧石器時代文化研究の一環として1996～99年にかけて河原第14遺跡（西原Ｆ遺跡）の発掘調査を継続的に実施してきた[1]。その結果、同遺跡には旧石器文化期の文化層５枚と縄文時代早期後半の文化層１枚が存在することが確認された。さらに当地域では初めて、百花台型台形石器を含む西北九州系の石器群を層位的に確認した。

調査の目的

このように、この地域の層位的安定性および石器群の特徴から、中九州における旧石器時代文化研究の上で、極めて重要な地域であると判断した。以上の成果を受けて、本年度よりは、以前から石器採集地として知られ、良好な遺物包含層の存在が予想される、河原第３遺跡を調査対象とした試掘調査を実施した。

調査経過

調査区は、遺跡中央を走る農道の北側に、土層の堆積状況確認を目的として１トレンチ（２m×２m）を設定した。１トレンチではⅠ層からⅣ層上面まで掘り下げ、Ⅱ層からⅣ層にかけて縄文時代早期相当期の礫群を検出した。また、調査期間内に１トレンチの完掘をおこなえないと判断したため、農道南側の露頭に２トレンチ（3.5m×1.5m）を設定した。２トレンチは層が厚くⅠ層からの掘り下げが困難であったため、姶良丹沢火山灰（以下ＡＴ、約25000年前）層下位の石器群の様相を確認する目的も兼ねてⅫ層から掘り始めた。２トレンチではⅫ層からⅩⅣ層上面まで掘り下げ、ⅩⅢ層下部より後期旧石器時代前半期の剥片数点が出土した。また、以上の調査と並行して２トレンチ西側の露頭部の下に深掘トレンチ（２ｍ×１ｍ）を設定し、露頭の土層断面図を作成した。遺跡の地形測量は時間の都合により10月に入ってからおこなった。今回の調査面積は、11㎡である。（安武）

調査面積

註（１）藤木聡編「付篇　西原Ｆ遺跡」『用見崎遺跡Ⅲ』研究室活動報告32　熊本大学文学部考古学研究室　1997
藤本圭司編「Ⅱ　西原Ｆ遺跡２」『考古学研究室報告』第33集　熊本大学文学部考古学研究室　1998
藤木聡編「Ⅱ　西原Ｆ遺跡３」『考古学研究室報告』第34集　熊本大学文学部考古学研究室　1999
橋口剛士編「Ⅱ　西原Ｆ遺跡４」『考古学研究室報告』第35集　熊本大学文学部考古学研究室　2000

2．層序（第１表、図版１中）

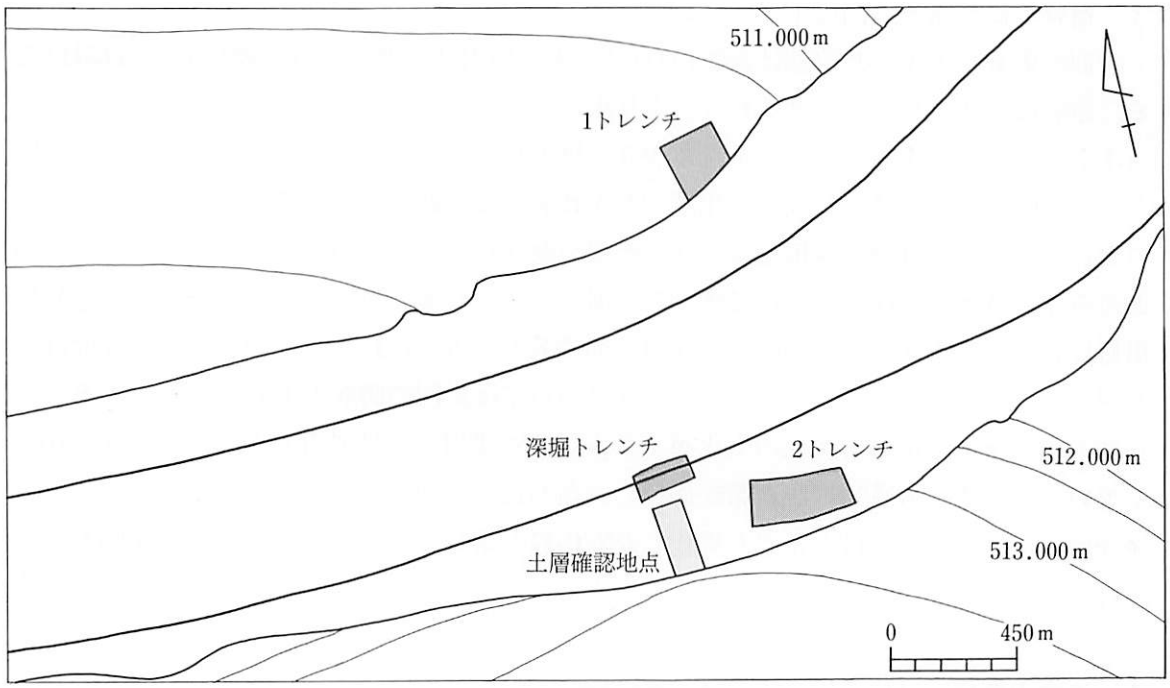
基本層序

今回の調査で確認した層は14枚で、上からⅠ層、Ⅱ層…ⅩⅣ層とした。その結果、Ⅲ層中にアカホヤ火山灰（以下Ah、約6400年前）、Ⅸ層中にＡＴを含むことが確認された。

河原第14遺跡との比較

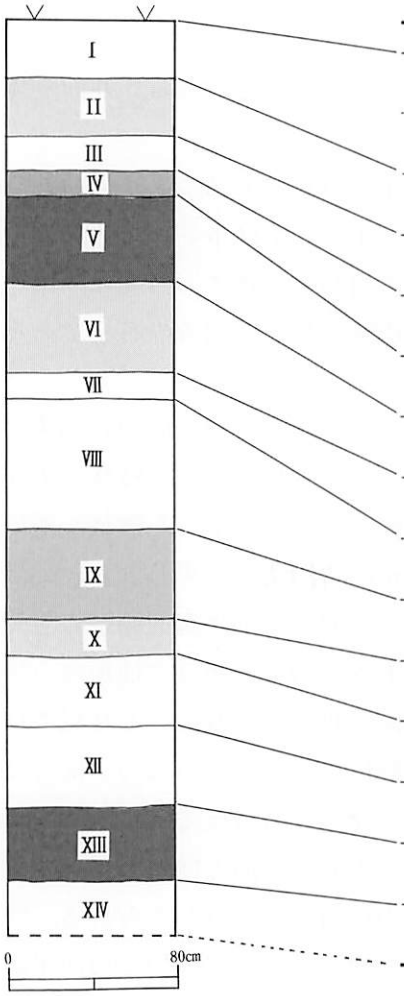
昨年度まで調査をおこなっていた河原第14遺跡の層序と本遺跡の層序を比較すると、ＡＴ下位の層に違いが見られた。河原第14遺跡のＡＴはⅤb層下部～Ⅵ層上部にかけて含まれ、Ⅵ層中にオレンジ色のパミスが見られた。これに対し、本遺跡では、ＡＴ下位に褐色土層であるⅩ～Ⅻ層が堆積し、その下に黒色土層であるⅩⅢ層が堆積していた。このⅩ～Ⅻ層中の所々にオレンジ色のパミスが帯状に堆積し、ⅩⅢ層からは遺物が検出されたことから、本遺跡のⅩⅢ層は上述した河原第14遺跡のⅦ～Ⅷ層と対比できる。しかしながら、本遺跡におけるⅩ～Ⅻ層は、河原第14遺跡では確認されなかった。この理由として、①現在でも遺跡付近に川が存在する、②谷状の地形であることから遺跡付近が流路になる可能性がある、③河原第14遺跡よりも地形的に約30m低い、④層中に小礫を多く含んでいる、以上のような要因が考えられ、Ⅹ～Ⅻ層は本遺跡付近に顕著に堆積したものと考えられる。（芝）

Ⅹ～Ⅻ層の検討



第２図　調査区設定図

第１表　土層柱状図及び観察表



自然層	色調※	特　徴	層厚
Ⅰa層	黒色土層 (1.7/1)	表土。攪乱をうけている。	20～30cm
Ⅰb層	黒色土層 (1.7/1)	粘性がなく、土にしまりがない。	
Ⅱ層	褐色土層 (10YR4/6)	粘性がなく、粒子が細かい。礫が存在する。	20～25cm
Ⅲ層	明黄褐色土層 (10YR6/8)	Ah火山灰を含む。礫が存在する。	10～15cm
Ⅳ層	暗褐色土層 (10YR3/3)	粘性があり、粒子が細かい。礫群が存在する。	5～10cm
Ⅴ層	黒色土層 (1.7/1)	Ⅳ層に比べて粘性が強く、粒子が細かい。	30～40cm
Ⅵ層	褐色土層 (10YR4/6)	堅くしまる。	35～40cm
Ⅶ層	黄褐色土層 (10YR5/6)	粘性があり、堅くしまる。粒子が細かい。	5～10cm
Ⅷ層	黄褐色土層 (10YR5/8)	粘性があり、柔らかい。色調は明るい。	45～55cm
Ⅸ層	褐色土層 (10YR4/4)	粘性がある。色調は上下の層に比べて暗い。AT包含層。	30～40cm
Ⅹ層	褐色土層 (10YR4/6)	粘性が非常に強い。砂粒を含む。オレンジ色のパミスを包含する。	10～15cm
Ⅺ層	黄褐色土層 (10YR5/6)	粘性が強く、堅くしまる。Ⅹ層に比べて大きめの砂粒を含む。オレンジ色のパミスを包含する。	25～30cm
Ⅻ層	褐色土層 (7.5YR4/6)	粘性がある。径１～５cm前後の小礫を多くオレンジ色のパミスを包含する。	20～35cm
XIII層	黒色土層 (5YR2/1)	堅くしまる。剝片が出土。	25～40cm
XIV層	黄褐色土層 (10YR5/6)	粘性がある。層厚は不明。	

※色調は　小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社　1986　によった

3．遺物の出土状況（図版１下）

今回の調査で出土した遺物は総数154点で、その内訳は土器片５点、礫135点、石器14点である。遺物は、１トレンチ、２トレンチより出土する。

土器の出土状況

１トレンチではＩ層で無文の土器片が３点出土しているが、撹乱を受けているため、原位置をとどめていない。縄文時代の文化層であるII層では土器片が２点確認された。いずれも無文の土器片である。II層からIII層にかけて小礫が散在しており、調査トレンチ南側の切り通し断面をみるとII層からIV層にかけて礫群の一部と思われる礫を数個確認できることからII層からIII層に含まれる小礫は下位の礫群遺構の一部であると考えられる。今回の調査では礫群の全容を明らかにすることはできなかった。これについては次回の調査とあわせて報告する。

礫の出土状況

石器の出土状況

２トレンチでは旧石器時代の文化層であるXIからXIII層にかけて剥片が４点、砕片が10点出土している。いずれもXIII層の黒色帯が傾斜し、落ち込んだ部分に分布している。

今回出土した石器のほとんどが風化した安山岩を素材としていた。砕片では黒曜石も３点みられる。（宮本）

4．遺物の概要（図版２）

出土遺物（第４図１～４）

すべて不定形の剥片である。石材はいずれも風化の著しい安山岩である。第４図－３・４は同一母岩であると思われる。

採集遺物（第４図５～10、第５図、第６図）

押型文土器

５は、２トレンチ側のＶ層切り通し断面において採集された押型文土器である。外面全体に山型文を横行させる。全体の器形は不明である。

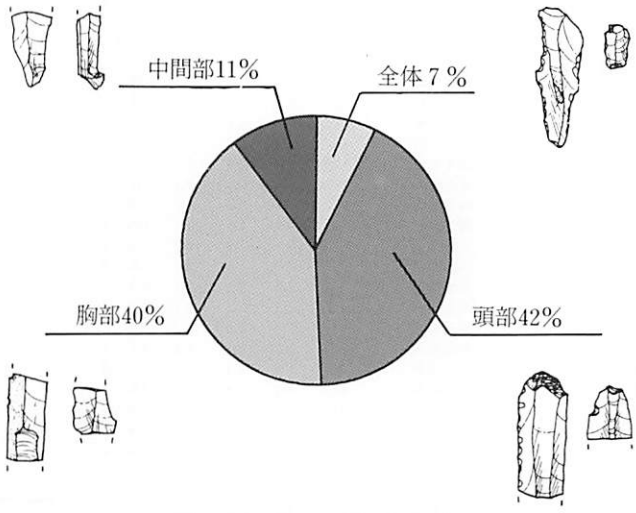
６～10は不定形の剥片である。６は２トレンチ切り通し断面のXIII層の下部にて採集された剥片である。背面に自然面を残し、風化の著しい安山岩を石材とする。７は１トレンチ切り通し断面において採集された。チャートを石材とする。８は背面に自然面を残す。西北九州産の黒曜石を石材とする。９は風化の著しい安山岩を石材とする。遺物番号２と同質の石材である。10は風化した安山岩を石材とする。

11は台形様石器である。素材剥片を横位に用い、両側縁を折断した後、腹面側から急角度調整を施す。ほぼ三角形を呈する。石材は安山岩である。12は、二面を加工した三稜状の尖頭器である。剥片を横位に利用し、背面には急角度調整により、稜が形成される。左側縁上端には腹面からのノッチ状の調整が入れられている。石材は西北九州産の黒曜石と思われる。13は小型のナイフ形石器である。左側縁に刃部を残し、右側縁全部と左側縁下部に腹面側から急角度調整を施す。石材は安山岩である。14～16は不定形の剥片である。14は右側縁に使用痕（図中矢印で示す）が観察できる。チャートを石材とする。15は背面に自然面を残し、それ以外はほぼ全側縁にわたって使用痕が認められる。16は下部全縁と右側縁の一部、左側縁の一部に使用痕が認められる。15、16とも漆黒の黒曜石を石材とする。17、18は細石刃核である。17は黒曜石の角礫を用いたものと思われる。調整剥離を上下面に施し、上面に背面方向から細石刃剥離のための打面を形成している。背面から右側面にかけて８条の細石刃剥離痕がみられる。腹面には自然面と調整剥離痕を残す。18も黒曜石の角礫を用い、上面には打面形成のための平坦な剥離が施されている。背面には、細石刃を剥離した５条の剥離痕がみられる。左側面は素材を

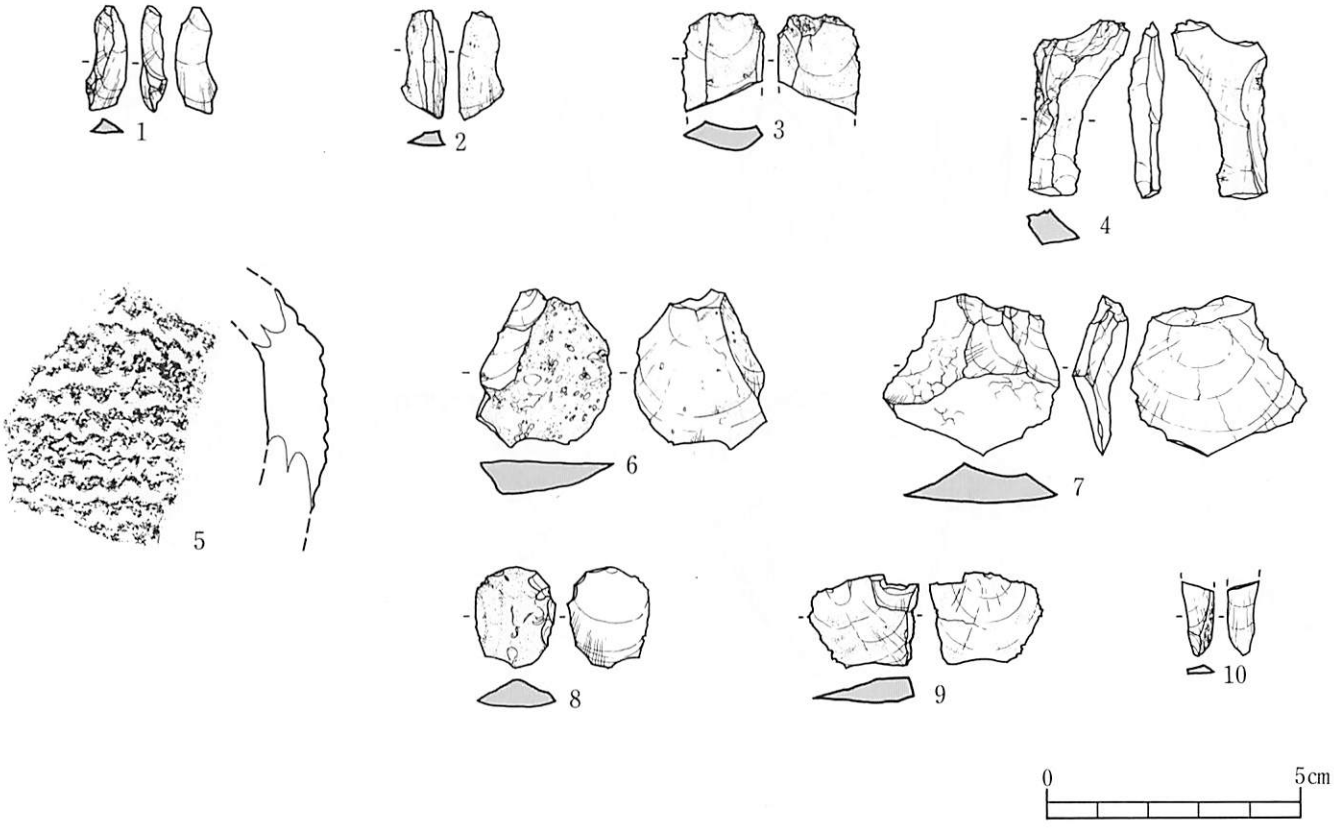
細石刃核

調整した剥離痕がみられ、背面に自然面を残す。19～85は細石刃である。頭部、尾部、もしくはその両端が折断されているものが多く、細石刃全体の93％を占める。頭部、胴部、尾部の残存する割合は第３図に示す。頭部が残るものには、細石刃剥離前に頭部調整が施されたものが半数以上確認できる。頭部調整が施された細石刃の頭部形状は半円形であり、点状の打点を残す。頭部調整が施されないものは、ほとんどの頭部形状が台形もしくは四角形で、平坦打面を残す。石刃刃部は19が大きく反りをみせる他、ほとんどが反りをみせず、直線的な刃部をもつ。また36％の刃部には、刃こぼれや微細剥離痕などの使用痕を観察することができる。38の右側縁の調整痕は、核に側縁側から調整を加えた後にその部分を剥離、除去したものと思われる。

以上、細石刃核・細石刃はすべて黒曜石を石材とするが、その中でも同一の石材と思われるものを４種類に分けることができた。細石刃核の17と細石刃の19～22は漆黒で気泡の入った黒曜石（Ob－１）を、細石刃核の18と細石刃の73～85は透明度の高い黒曜石（Ob－２）を石材とする。また、細石刃の23～50は漆黒の黒曜石(Ob－３)、細石刃の51～72は透明度が高く、筋の入った黒曜石（Ob－４）を石材とする（Ob－１～４は観察表に示す）。　　（宮本）



第３図　細石刃部位別グラフ

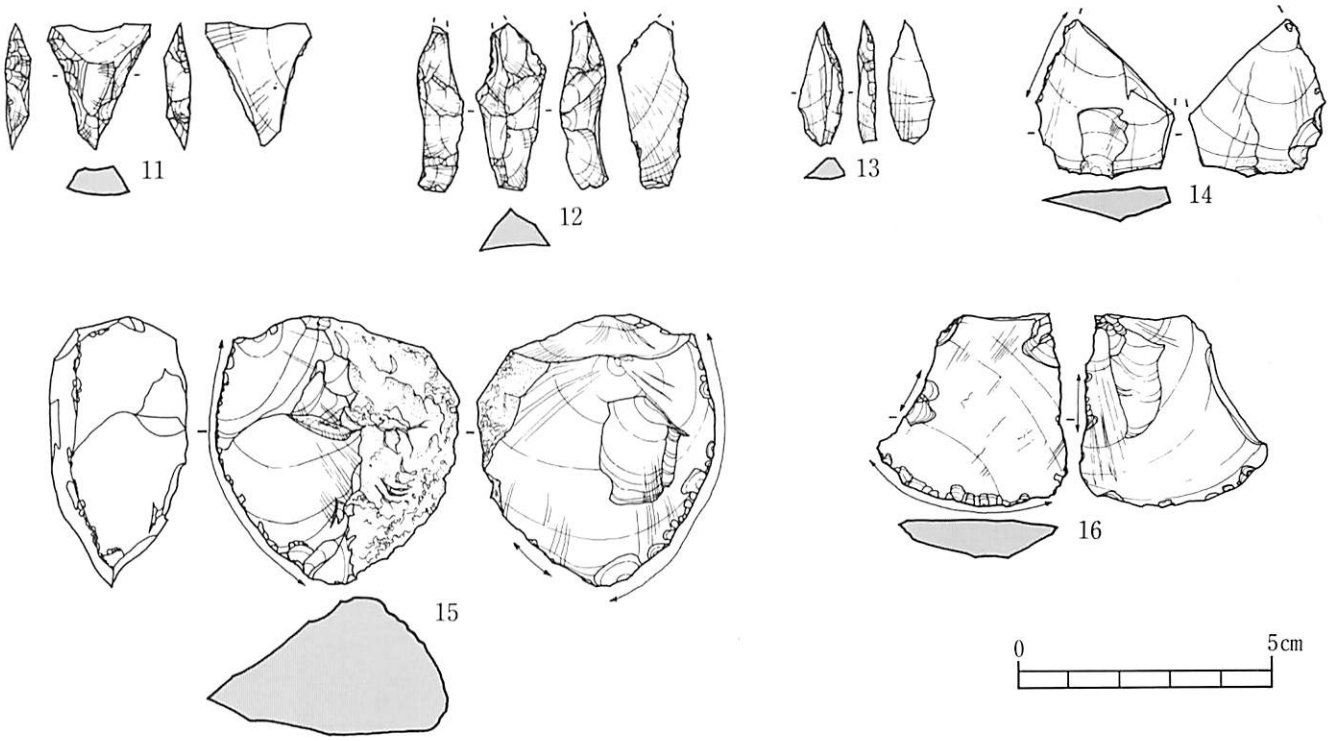


第４図　出土遺物・断面採集遺物実測図（1～4は出土遺物、5～10は調査時採集遺物）

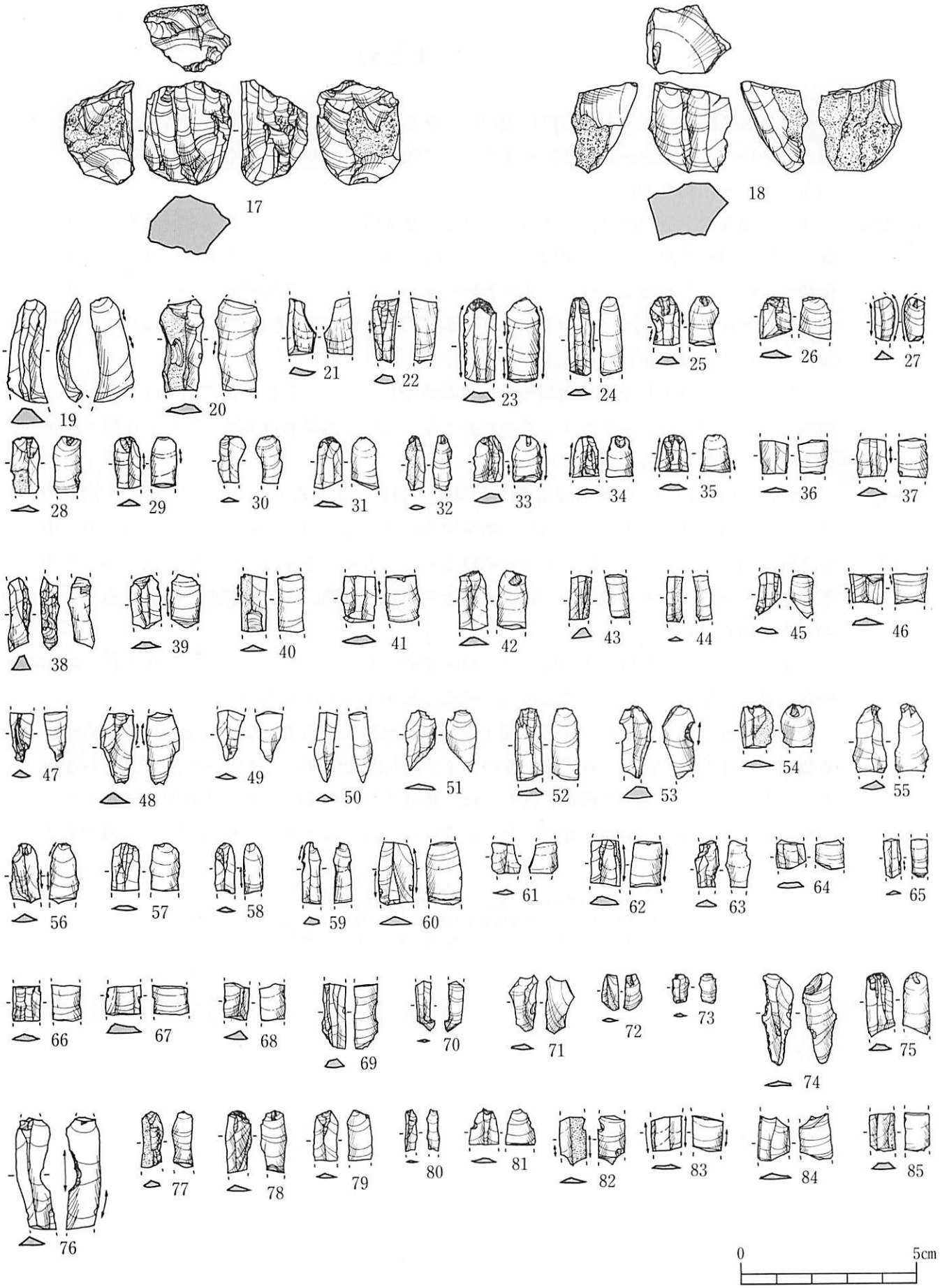
第２表　遺物観察表

	番号	器種	トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
第4図	1	剥片	2	XⅢ層	20.3	7.6	4.3	0.4	An
	2	剥片	2	XⅢ層上面	(21.2)	8.4	2.4	0.4	An
	3	剥片	2	XⅢ層	(18.0)	16.8	5.0	1.4	An
	4	剥片	2	XⅢ層	(34.1)	18.2	7.0	2.6	An
	5	押型文土器	2	壁面（Ⅴ層）					
	6	剥片	2	壁面（Ⅴ層上面）	31.4	25.3	8.3	5.4	An
	7	剥片	1	壁面採集	30.8	34.2	8.8	6.8	Ch
	8	剥片		表面採集	17.4	21.5	6.5	2.2	Ob
	9	剥片		表面採集	17.4	21.5	6.5	2.2	An
	10	剥片		表面採集	(13.9)	6.1	2.0	62.0	An
第5図	11	台形石器		表面採集	24.5	20.8	4.7	1.9	An
	12	尖頭器		表面採集	32.8	13.3	8.5	2.9	Ob
	13	ナイフ形石器		表面採集	23.5	8.6	3.6	0.6	An
	14	使用痕のある剥片		表面採集	29.3	26.9	6.2	4.4	Ch
	15	使用痕のある剥片		表面採集	53.8	46.7	26.6	55.2	Ob
	16	使用痕のある剥片		表面採集	37.0	37.0	2.0	6.2	Ob
第6図	17	細石刃核		表面採集	28.6	24.5	19.0	12.7	Ob－1
	18	細石刃核		表面採集	24.4	22.3	18.4	10.0	Ob－4
	19	細石刃		表面採集	28.5	11.2	5.2	1.1	Ob－1
	20	細石刃		表面採集	24.9	12.2	3.1	0.9	Ob－1
	21	細石刃		表面採集	15.4	7.6	1.8	0.2	Ob－1
	22	細石刃		表面採集	18.0	7.8	2.0	0.3	Ob－1
	23	細石刃		表面採集	23.4	9.2	2.8	0.6	Ob－2
	24	細石刃		表面採集	21.5	6.4	2.1	0.3	Ob－2
	25	細石刃		表面採集	13.3	7.6	2.2	0.2	Ob－2
	26	細石刃		表面採集	11.8	8.4	2.3	0.2	Ob－2
	27	細石刃		表面採集	11.9	5.7	2.1	0.1	Ob－2
	28	細石刃		表面採集	15.5	8.4	2.8	0.2	Ob－2
	29	細石刃		表面採集	14.0	6.9	2.1	0.2	Ob－2
	30	細石刃		表面採集	13.2	6.9	1.9	0.2	Ob－2
	31	細石刃		表面採集	14.3	7.0	1.9	0.2	Ob－2
	32	細石刃		表面採集	15.1	5.0	1.3	0.1	Ob－2
	33	細石刃		表面採集	13.0	8.7	2.2	0.3	Ob－2
	34	細石刃		表面採集	11.4	7.2	1.5	0.2	Ob－2
	35	細石刃		表面採集	10.2	8.2	2.1	0.2	Ob－2
	36	細石刃		表面採集	9.4	7.8	1.4	>0.1	Ob－2
	37	細石刃		表面採集	10.4	8.4	2.4	0.2	Ob－2
	38	細石刃		表面採集	19.3	7.4	4.6	0.4	Ob－2
	39	細石刃		表面採集	14.9	8.5	2.0	0.3	Ob－2
	40	細石刃		表面採集	16.0	7.0	1.8	0.2	Ob－2
	41	細石刃		表面採集	13.1	8.8	2.6	0.3	Ob－2
	42	細石刃		表面採集	16.4	8.1	2.5	0.3	Ob－2
	43	細石刃		表面採集	12.3	5.9	2.1	0.2	Ob－2
第6図	44	細石刃		表面採集	12.8	4.5	2.0	0.1	Ob－2
	45	細石刃		表面採集	11.4	6.2	3.0	0.1	Ob－2
	46	細石刃		表面採集	8.7	8.5	1.5	0.2	Ob－2
	47	細石刃		表面採集	13.2	6.3	3.3	0.2	Ob－2
	48	細石刃		表面採集	19.7	9.3	4.3	0.6	Ob－2
	49	細石刃		表面採集	13.8	7.4	1.5	0.1	Ob－2
	50	細石刃		表面採集	18.9	5.7	2.5	0.1	Ob－2
	51	細石刃		表面採集	16.9	8.2	3.0	0.2	Ob－3
	52	細石刃		表面採集	20.2	7.6	1.6	0.3	Ob－3
	53	細石刃		表面採集	18.6	9.0	3.3	0.4	Ob－3
	54	細石刃		表面採集	14.0	8.8	2.0	0.2	Ob－3
	55	細石刃		表面採集	18.8	9.3	2.4	0.3	Ob－3
	56	細石刃		表面採集	15.7	8.0	2.2	0.2	Ob－3
	57	細石刃		表面採集	12.7	7.9	1.9	0.2	Ob－3
	58	細石刃		表面採集	13.0	5.9	1.0	0.1	Ob－3
	59	細石刃		表面採集	16.9	5.3	2.1	0.2	Ob－3
	60	細石刃		表面採集	17.1	10.1	2.7	0.5	Ob－3
	61	細石刃		表面採集	8.0	7.5	1.3	>0.1	Ob－3
	62	細石刃		表面採集	12.4	8.4	2.1	0.2	Ob－3
	63	細石刃		表面採集	12.9	6.3	2.0	0.1	Ob－3
	64	細石刃		表面採集	7.5	7.9	1.1	0.1	Ob－3
	65	細石刃		表面採集	10.5	5.0	1.3	0.1	Ob－3
	66	細石刃		表面採集	10.2	7.8	1.7	0.2	Ob－3
	67	細石刃		表面採集	8.1	9.5	2.1	0.2	Ob－3
	68	細石刃		表面採集	9.8	6.9	2.4	0.2	Ob－3
	69	細石刃		表面採集	17.3	6.6	1.9	0.3	Ob－3
	70	細石刃		表面採集	13.6	5.0	0.9	0.1	Ob－3
	71	細石刃		表面採集	15.2	7.4	2.0	0.2	Ob－4
	72	細石刃		表面採集	9.6	4.8	1.0	>0.1	Ob－3
	73	細石刃		表面採集	8.1	4.3	0.6	>0.1	Ob－3
	74	細石刃		表面採集	24.9	8.6	2.7	0.3	Ob－4
	75	細石刃		表面採集	(16.0)	7.6	2.4	0.4	Ob－4
	76	細石刃		表面採集	(30.8)	9.4	3.2	0.6	Ob－4
	77	細石刃		表面採集	14.8	5.8	2.1	0.2	Ob－4
	78	細石刃		表面採集	16.8	7.0	2.0	0.2	Ob－4
	79	細石刃		表面採集	13.9	7.0	1.4	0.2	Ob－4
	80	細石刃		表面採集	11.2	3.5	0.7	>0.1	Ob－4
	81	細石刃		表面採集	9.0	8.5	1.9	0.1	Ob－4
	82	細石刃		表面採集	13.0	7.8	1.9	0.1	Ob－4
	83	細石刃		表面採集	9.2	8.4	1.5	0.2	Ob－4
	84	細石刃		表面採集	12.0	8.6	1.7	0.2	Ob－4
	85	細石刃		表面採集	10.4	7.0	2.1	0.2	Ob－4

※番号は実測図の番号に対応　※単位：長さ、幅、厚さ＝mm、重さ＝g　※（ ）内は残存する中での最大値
※石材名　Ob：黒曜石（詳細は本文中に示す）An：安山岩　Ch：チャート



第５図　採集遺物実測図



第６図　採集遺物（細石刃核・細石刃）実測図

三　まとめ

河原第３遺跡の所在する大矢野原周辺は、県下有数の旧石器時代遺跡の密集地である。本遺跡はその中でも、以前から石器採集地点として知られており、数多くのナイフ形石器、三陵尖頭器、細石刃、細石刃核等が採集されてきた[1]。

今年度調査の目的

今年度調査の主な目的は、遺跡内における土層堆積状況の確認であった。調査の結果、本遺跡の土層は14枚確認できた。Ⅲ層中にAhをⅨ層中にATを含み、本遺跡は良好な堆積状況を保持していることが確認された。またⅩ層～Ⅻ層にかけて、噴出起源不明のオレンジ色のパミスが確認された。同様のパミスは石の本遺跡、河原第14遺跡等でも確認されており[2]、噴出起源及びその年代の解明が望まれる。

AT層下位の剝片

今回の調査でAT層下位のⅩⅢ層から剝片数点が出土した。定形石器の出土はなかったものの層位の対比状況から、前年度まで調査をおこなっていた河原第14遺跡の第６文化層とほぼ同時期のものと判断される。

使用石材

石材は、AT層下位からの出土遺物では風化の著しい安山岩がその大半を占める。同様の石材は、河原第14遺跡でも出土しており、阿蘇周辺に広がる在地系の石材である。細石刃を中心とする採集遺物については、黒曜石がそのほとんどを占め、漆黒色で透明度の高い西北九州産のものと、気泡のはいる小国産の二種に大別できる。この他、緑川流域産と思われるチャート製の剝片が数点見られる。

１トレンチでは、Ⅱ層～Ⅳ層にかけて縄文早期のものと思われる礫群が検出され、断面の観察からⅡ層～Ⅲ層にかけての礫はⅣ層の礫群に起因するものと思われる。

今後の課題

今回の調査では、１トレンチはⅣ層上面までしか掘り進めていない。採集遺物から予想される細石刃文化期の文化層、AT層上位のナイフ形石器文化期の文化層を検出できていない。また、１トレンチで検出した礫群に関しては、取り上げが完了しておらず範囲の確認もおこなえていない。また遺跡の範囲も確認できていない。これらはすべて今後の調査の課題である。

（安武）

註（１）木崎康弘ほか「Ⅳ　遺跡と遺物」『肥後考古』第５号　肥後考古学会　1985
（２）池田朋生編『石の本遺跡群Ⅱ』熊本県文化財調査報告第178集　熊本県教育委員会　1999
橋口剛士編「Ⅱ　西原Ｆ遺跡４」『考古学研究室報告』第35集　熊本大学文学部考古学研究室　2000